生涯学習基盤経営研究 第 36 号 2011 年度

高齢社会における団地の現状

−千葉県千葉市：第二稲毛ハイツへのアンケート結果から−

飯島千鶴子 †

† 東京大学大学院教育学研究科研究生

超高齢社会を迎えつつある時代，様々な問題が各団地内で生じている。夢の持てる未来を展望するためには，人間として生きて行く上で安心，安全を感じられる社会システムの構築が求められる。本研究は，筆者が 10 年以上居住した千葉県千葉市稲毛区の稲毛ハイツをフィールドワークとし，アンケート調査から住民の問題意識や要望を分析した。その上で，「いくつになっても，住み慣れた地域で安心して自分らしく生きる」（Aging in place）ことのできるサスティナブルなコミュニティにするために何が一番大切なのかを考察した。

キーワード：高齢社会，コミュニティ，人材育成，持続可能な社会

目 次

1 研究の背景

1.1 研究の目的
1.2 先行研究
1.3 調査の概要
1.3.1 アンケート調査の目的と対象
1.3.2 調査設計

2 アンケート調査の結果

2.1 住民主体の活動について
2.2 イベントについて
2.3 環境活動について
2.4 防犯対策
2.5 福祉
2.6 防災
2.7 団地内の交流
2.8 住民の要望

3 まとめと考察

1 研究の背景

2030 年には団塊の世代が 80 歳になり，65 歳以上の高齢者が人口の 1/3 を占める超高齢社会となる[1]と言われている。

住環境に着目すると， 築 50 年以上のマンションが全国で 94 万戸に達する。1981 年の耐震基準策定以前に供給されたマンションの数は 106 万戸で，2030 年にはこれが築 49 年以上に達してしまう。これらの建物は耐震強度が低いこともあって，早めに建て替えが必要となってくる。阪神淡路大地震での建物崩壊の悲惨な事例は人々の心に深く刻み込まれたことであろう。

また，認知症疾患高齢者も年々増加，「老老介護」，「認認介護」の問題は深刻さを増す。情報化社会において，価値観の多様化，核家族の定常化から更に崩壊してしまって，一人暮らしの高齢者が増え続ければいろいろな問題が出てくる。介護施設入居，終末期ケアの高齢者の対応問題，国外への逃避(タイ，マレーシア等，低賃金で生活ができ介護ケアも受けられ， 安全･安心が保証されるところ)で空き家になる。核家族で子供が出て行けば老人の二人暮らし，一方が死亡すれば一人暮らしを余儀なくされるか，他に移り住んで，これまた空き家になる。

慢性疾患，医療ニーズの増大から介護者の負担

増加になり，トラブルが起こる。本人または家族が支援や関わりを拒否することから心中，孤独死にまで至ることもある。特に，介護の肉体的，精神的負担から精神的に追い詰められ，高齢者虐待も問題視されてきている。孤老の人は身の回りのことがおろそかになったり，出来ない状態を口実に，部屋の中はもちろんベランダがゴミ溜まりになり，ハトが巣をつくり住みついて近所迷惑になったり，「におい」で問題になったりする。ストレス解消から高齢者の万引きも増え続けている[2]。

個人情報，プライバシー保護の壁もあり，民生委員の高齢化で対応が不充分だったり，また大変な役目なので補充が困難な状態にあるのが現状で，対応･対策は困難を極める。(第二稲毛ハイツ民生委員 50 代，60 代)以上のようなマンション住民の生活上での様々な課題が出てきた。

戦後の高度成長期，地方からの集団就職をはじめ職を求めて人々は都市に流入し，そのために都市部では深刻な住宅難を伴った。地価は著しく高騰し，政府も業者も地価の安いところを宅地造成して住宅難を解消しようとした。しかし民間主導の無計画，無秩序，無節操な開発は劣悪なスプロール化をもたらし，災害のリスクが問題になっている。一方，宅地を大量に供給することを目的としたニュータウンが次々に出現してくることになった[3]。 それらの多くも箱物づくりが目的で社会的要請に対応した，コンパクトシティの発想で集合住宅地域を考えることは出来なかった問題点として就学児童･生徒の減少， 入居者の高齢化と建築物の経年老朽化，耐震限界度，同地域で生まれ育った若者達の多様な価値観への変化，職住近接への指向，地域コミュニティの希薄化などにより住宅地としての活力の低下，新たな価値の再生が必要なことが指摘できる。特に，日本においてはいつ，どこにおいても強い地震災害が起こる可能性があることから，一般的には耐震強度，将来の建て替えについて不安を訴える住民も多い。これらの課題は，子供や高齢者のためだけでなく，現役世代，若年層を含めた全ての世代にとっての課題である。そうした意識を全ての人々が共有しなければならない。

高齢者は知識・経験を活用する能力―結晶性知能―を大いに活用し，次世代に伝え，残すべきである。自分たちの育った時代から現代までの歴史を振り返り，「地域力」を開発するための構想・構築を明確にし，活性化を図らねばならない。持続可能な安心・安全な住みやすい地域にするための構想は，若年層，現役世代のアイディアと行動力，活力が頼りになるだろう。子供は全ての大人から「夢」の実現のための知識や経験を学び，身につけ，「地域力」に繋げていくような本物の力を身につけていくことが大切である。このように世代間を越えたところでの人材育成が主要テーマとなる。

今回の 3.11 東日本大震災を経験し， いつ何処で，誰にでも襲いかかってくる自然の猛威，過酷な試練に日本中が改めて心を引き締めたことであろう。台風被害を含めて，どのような災害が起こっても，それに立ち向かい熾烈な困難を乗り越えていくためには，強い絆づくりが大切である。共働，共同，共生の必要性はわかっていても，いざとなったとき稼働しなければ何の意味もない。それらが成就可能な人間をコミュニティで育成していかねばならない。そのための育成できる「場」と「人」が必要な条件となる。

1.1 研究の目的

どうしたら安心･安全，持続可能な魅力あるコミュニティが形成できるのか。どうしたら「継続的に住める」，「高齢者でも働く場所がある」，「様々な学びの機会と施設の充実」，「健康管理ができ，憩える場所の設置」など住民の日々の営みを満たす多機能複合空間，緑豊かで安全な生存環境に配慮した理想的な共生共存できる地域ができるのか。全国的規模でこうした問題が続出してきている現在，少なくとも多機能複合空間の設置問題を取り上げる意味は大きい。

① 多世代が協力し合って知恵を出し合い，安心・安全，持続可能な地域づくりができるための拠点づくり，② 地域で子育て，高齢者や介護を必要とする人々のケアができる拠点づくり，③ イベントや様々な活動を通して，外からの意見を取り入れ，アイデアを活かす計画を立て実行する，それはまさに人材育成のできる拠点づくり，④ リサイクルをはじめ様々な生活環境，学習のできる拠点づくりなど，地域における拠点づくりは意味を持つ。

人々が気軽に集まれ，そこでコミュニケーションすることで絆づくりや，助け合い，多世代間の交流の輪が広がり，新たな出会いが生まれる場所，「コミュニティの中心」— そのようなコミュニティ空間を醸成，活用する試みが 3.11 震災以前にも見られたが，特に震災以降は日本各地で行われるようになってきた。神社・お寺，農園，廃校，公民館等，利用できる「場所」の開発が試みられている。副都心といわれるような地域には特に高齢社会団地が多く存在する。千葉県千葉市稲毛区の団地もその一つである。まず，第二稲毛ハイツが拠点づくりの計画，推進に取り組む第一歩としてアンケート調査をすることになった。住民の意識がどこにあるのか，どの程度のものであるかを知る必要がある。その一つの方法としてのアンケート調査であったが，設計段階から明らかにすべき目的に応じた階層化や構造化がなされていなかった点は，次回のアンケートに生かすことにしたい。

まずは今回の調査分析をしっかりやった上で記録する。同様な取り組みをしているところと情報交換し，連携することでより一層充実したサスティナブルなコミュニティとすることを目標とする。例えば，(千葉県柏市高柳地区の「鎮守の杜」構想，千葉県千葉市花見川区のエステ・シティ海浜幕張の「コミュニティ広場」構想等)他地域と祭，イベント，公開講座，ボランティア活動等を通し，交流が深まると人材発掘・育成，活性化が図られる。「地域力」の開発，それは人材育成問題に関わる「人」と「場」の主体形成を求める研究目的でもある。

1.2　先行研究

超高齢，少子化問題を抱える地域で，地域力の活性化問題に関心を持つあらゆる分野の研究ビジョンは主に次のようなものを考えた。① 住環境，住民の意識と行動力，　② 健康，医療サービスと施設，　③ 夢，生き甲斐と就労，　④ 支援のための技術と予算，　⑤ 多世代間コミュニケーションと居場所，　⑥ 人材育成と社会教育，である。

前説のような視点で研究がなされてきただろうか。広井良典[4]は多くの著書で，新たなコンセプトと共に社会保障，教育改革の具体的道筋を示し，環境制約との調和，コミュニティの再生を含みこんだ「持続可能な福祉社会像」をトータルに，大胆に提示してくれてはいるが，「人間を無力にさせる未曽有の危機」に襲われたとき，「社会のパラダイムが転換し，新しい社会を構築していく必要がある」と信じて前向きに，情熱を持って対処できる人材育成については語られていない。

鎌田実[5]の「ジェロントロジー論」—明るく豊かな超高齢社会を築くための課題解決には，課題性そのものをビジネスチャンスと考え，再現性のある町づくりのモデル化，マニュアル化を進める必要性を説く。東大ではモデルの社会的実験として都市型モデルを千葉県柏市，地方型モデルを福井県福井市に設定し，「東京大学ジェロントロジー・コンソーシアム」の基本理念を「Aging in place 」として研究が続けられているが，子供の方に強いベクトルを向けた人材育成についての視点が弱い。

秋山弘子[6]は「長生きを心から喜べる長寿社会」への取り組みに力を入れているし，辻哲夫[7]は「長寿社会の医療」として“Aging in place”をかなえる在宅医療に注目し，まず医師としてのモーチベーションを高めることからはじめている。在宅医療モデルを「見える形にする」をモットーに医療・介護をトータルにとらえた改革を提唱してもいる。それは医師だけの特別任務ではない。支えるのは若い人達であり，そうした人材をどのように育てるか，そこまでは述べられていない。

村嶋幸代[8]は「長寿社会の看護」について問題点をあげ，大切なことは長寿社会を支える地域の看護ステーションが必要であることを説く。訪問看護ステーションからの 24 時間ケアの仕組みづくりを整えることで，一人暮らしの高齢者を地域で支える方法として考えた。秋山，辻，村嶋の説は老人福祉には欠かせない重要な視点で「地域力」を考えているが，予算，人材の確保の点で実現には大変な努力が強いられることに思い至っていない。

「地域力」[9]をつけていくためには，子供にも何が出来るかの視点が必要となろう。ボランティア精神が育たないと成人，大人だけでは問題解決は難しい。老人→成人→青年→少年→幼年者と人口の減少をきたす中で，コミュニティを支えていく人材をどのように育てていくのか。「誰が」，「い

つ」，「何処で」，「何を」，「どのように」試みることが地域の活性化につながるのかの視点は大切である。

長寿社会を明るくするための福祉工学から「長寿社会のテクノロジー」に注目した伊福部達は，現在想像以上に進んでいる「見る」，「聴く」，「話す」を助ける日本の科学技術が超高齢社会を救うと考えた。これから急速に高齢化するアジアを医療，福祉技術の大きなマーケットとして位置づけることで，経済発展に結びつけられる。また，経済を活性化することで就業率を上げ，生活を安定化させることで福祉予算のレベルアップにつながるとしている。高齢者そのものも「生き甲斐」の充実を図れると，川渕孝一[10]，西村周三[11]，小沢修司[12]，鎌田実もそれぞれの分野でそこに注目している。国際社会にあっても若者の就業率の低さが「暴動」につながるケースもある。「地域力」の一つとしてその地域で出来る仕事を皆で開発していくことが大切であり，人材育成にもつながる。世代間を越えて皆が話し合う中で素晴らしいアイディアが生まれてくる。そうしたアイディアを「ネット」を使うことで外に大きく広げる道を若者が開拓していってくれるだろう。

地域医療の充実は誰もが問題としているところで，岩本康志[13]の「早い準備で超高齢社会の経済を切り拓く」ための戦略は必要であるとしているし，広井良典は「人生前半の社会保障」を提言しているが社会保障財政がこれからの経済における課題でもあることから，財源確保の問題は深刻である。財政がこれからの地域経済の課題でもあるのは勿論であるが，不公平感のない制度設計で明るい未来をつくるコミュニティの存在は大きい。

樋口範雄[14]の気軽に頼れる弁護士が身近にいるコミュニティの存在は，安心・安全，終の棲家として住民の理想である。それは大月敏雄[15]の超高齢者の不安を解消できるような「長寿社会の水先案内人」のような「ワンストップ相談窓口」が不可欠で，地域社会のインフラの一つにならなければならないし，牧野篤[16]のいうサスティナブルなものにするためにソーシャル・ビジネス，あるいはコミュニティ・ビジネスへと発展させていく必要性があるが，そのためにも積極的に地域のために活躍してくれる人材が大切な存在になる。地域力を高め，継続させていくための多世代交流，特に高齢者と子供たちの交流は日常的に行われなければならない。その橋渡しをするのが青年，成人の現役世代である。稲毛ハイツでは特に人的資源を活用し，人材育成に取り組んで共同研究の場を構築することを目標としている。高齢化団地において「多世代交流型コミュニティ」に対する意識の高まりから，新聞にもしばしば掲載されるようになる。

藻谷浩介の「地域力」に関する研究，広井良典の「持続可能な福祉社会」，「コミュニティを問いなおす」，「定常型社会」等，独自のアンケート調査を踏まえた上での研究は参考になるが，それまでに至る過程を詳しく知ることはできない。個人の研究だけでなく，大阪千里ニュータウン，東京多摩ニュータウン，愛知高蔵寺ニュータウンなど，建築経年が 40 以上年経てば建て替えの時期を迎える。経済的に厳しい社会であれば住民の意識は高まる。(3.11 震災後岩手県陸前高田市の「地域力」を活かしたコンパクトシティがモデルケースとして注目されている。)「地域活動に関するアンケート調査結果報告書」大阪市(平成 20 年 3 月)，「日本の郊外ニュータウン国際長寿センター」(雑誌「住居」2000)，「自然と関わりを通じたケア―〈環境と福祉〉の統合に関する調査研究」(雑誌「住居」2000)，植田和弘，総合研究開発機構共編「循環型社会の先進空間」（農山漁村文化協会　2000），川野佐一郎「高齢者を支える安心と希望のコミュニティづくりに向けて」(相模原市，2009) など実地に進められている研究であっても，アンケート調査の項目に対して細かく分析，評価されていないし，ベクトルをどこにおいて調査結果を評価しているのかはっきりしない。実態を把握し，生かして次の段階へのステップへいくには常に現場に寄り添い，話し合いを続けながら積極的に活動を継続していかない限り，研究は深まっていかないだろう。役立てられる詳細な活動計画・実施の記録を掲載している研究は少ない。

1.3　調査の概要

1.3.1 アンケート調査の目的と対象

1975 年から入居が始まった第二稲毛ハイツは 1981 年の「新耐震基準策定」以前に供給されたマンションで，608 世帯。地理的条件にもよるが，

これらの建物は耐震強度が低い上にコンクリートの劣化による早期の建て替えが必要となってくる。第二稲毛ハイツは壁式ラーメン構造のため，築 70 年～80 年は大丈夫であるが，築 90 年以上経つ集合住宅では耐震強度，建て替えについての不安を訴える住民も多くなり，住民の高齢化に伴って緊急時の学習の必要性が増してくるだろう。2005 年 2 月，第二稲毛ハイツでは 30 周年記念フォーラムの開催に先立ち，主題を「今後の 10 年に向けて」に設定し，住民の意見を聞くアンケート調査を行った。住民 608 世帯中，提出数 209 件，全世帯の 1/3 の回答率であった。アンケート中で高齢化対策に関するもの 113，家屋の老朽化対策に関するもの 111, 防犯対策＋災害対策 82+72=154 であった。

稲毛ハイツではもっぱら(第一，第二，第三)三つのハイツのコミュニティ形成は，自治会，管理組合を中心にハイツ住民で組織されている。各種団体組織が横のつながりの相互扶助を行っている。しかしながら住民の少子高齢化が進み，生活スタイルや価値観の多様化による近所付き合いなどの人間関係の希薄化が目立ちはじめ，地域のコミュニティなど「地域力」の低下が憂慮されている。

建物の老朽化対策から再生への視点の重要性など，多様な福祉問題ともからんで，住民の意識の向上が不可欠である。意識は存在につながる，「住みやすい，魅力的なハイツづくり」，「平成 22 年度活動方針」のアクションプラン策定，　実践･実現に向けての取り組みが活動を担う住民一人一人の認識，学習，意識の向上，充実にかかってくる。そこで様々な問題解決のため，年齢を問わず多くの住民の地域活動への参加の仕組みづくりを検討するための基礎的，基本的な資料とすることを目的として，アンケート調査を実施した。（アンケート用紙を手にするだけでも問題意識を持ってくれるだろう。）

1.3.2 調査設計

調査対象は第二稲毛ハイツの 5 階建て, 20 棟 608 戸である。空室及び長期不在者室等が 26 戸有り，実質対象戸数は 576 戸で, そのうち回答戸数は 458 戸で回答率は 79.5%であった。2005 年 2 月に行ったアンケート調査では 608 戸中回答戸数は 269 戸で 34.3%の回答率から多くの住民参加が調査目標のまず第一歩となる。

調査期間は 2010 年 8 月吉日配布。提出期日 9 月 6 日（日）までである。紙調査は各階段委員のところへ提出し，委員は封筒ごと管理事務所へ届ける。調査対象者はハイツの住民で，家族の代表者 1 名が回答する。

調査対象者の属性は第二稲毛ハイツに 10～30 年以上の居住者が多く，高齢者で二人暮らしの世帯が 1/3 以上である。年金生活者が多く，サークル活動指向が強い。若年者の勤務先は首都圏内が多く「JR 稲毛駅」は快速電車が利用でき，乗り換えなしで東京駅着は便利である。ハイツから駅まで 10～15 分，東京駅まで 40 分。高齢者は定年退職まで東京，または東京周辺での就業者が多い。

アンケート回答者の居住歴に関しては，26～31 年という建築当初からの居住者は 53%, 10 年以上の居住者は 70%以上となる。

表 1　世帯の居住人数(一世帯)

1人	6%
2人	60%
3人	18%
4人	13%
5人	3%

1 世帯の居住人数では 2 名が 60%で半数以上。その家族構成では夫婦二人がほとんどである。

表 2　居住者年齢層

20代未満	7.2%
20代	1.3%
30代	6.8%
40代	10.5%
50代	10.9%
60代	33.2%
70代	25.1%
80代	4.6%
90代	0.4%

年齢層から見ると，60 代が 152 人で最も割合が

高く，70 代が 115 人で，2005 年～2010 年の 5 年間で，ますます高齢化が進んでいることが歴然である。第二稲毛ハイツに愛着を感じているかの質問で，「非常に感じている」，「感じている」，「まあ感じている」を合わせると 89%になる。この調査結果は，平成 17 年 9 月「ハイツのあゆみ 30」に掲載されている数字と変わっていない。第二稲毛ハイツに愛着を感じている住民が多いということである。

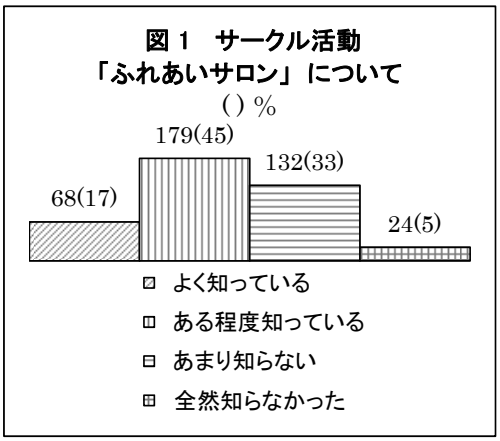
ある 64 歳の女性にインタビューを試みた。「ハイツへの愛着の源は？」「静かな環境と自然に恵まれ，サークル活動の多様さが魅力。自分は踊りの仲間が信頼できるので，何かあると助けてもらえて安心して生活できる。」との返事であった。また，ある 72 歳の男性に同じ質問をすると，「自治会，管理組合の活動がしっかりしている。近くにある病院のケアが信頼できる。静かで安心して住めるところ。」と述べる。何人かの人に同じ質問をして返ってきた答えは，静かで安心・安全，買い物にも困らない。自治会，管理組合の面倒見が良く信頼できる。リーダーがしっかりしている。環境としてもよい。といったものが多かった。リーダーとリーダーを助ける活動家とチューターによる連携がうまくいって中核体が活動の基盤となる，といった意見もあった。

第二稲毛ハイツでは自治会，管理組合との連携がうまく行われており，リーダーの人柄から「中核体」もしっかり出来上がってきている。3 回のアンケートの回答率の高さからもそのことがうかがえる。人材育成の「要」づくりはしっかりしてきているのであるから，「方法論」，「場づくり」が課題となるだろう。

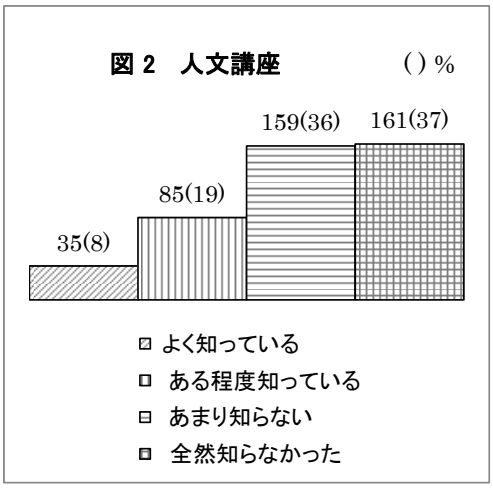
2　アンケート調査の結果

2.1　住民主体の活動について

サークル活動「ふれあいサロン」（図 1）はあくまで住民主体・参加型のものであるが，各サークル活動に関しては自治会が支援している。まずはサークル活動に対する認識である。その点では「知っている」が 62%であることから，半分以上は知っていることになる。



サークル活動は他にテニス，卓球，太極拳，パソコン，ゴルフ，写真，カラオケ，グランドゴルフ，日本舞踊，囲碁，植栽ボランティア，国際交流等 20 近くあるが，　次にあまり知られていない講座について確認したものである。



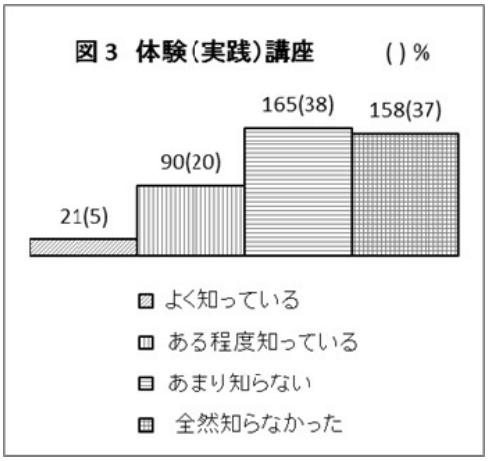
人文講座（図 2）は，社会問題一般を取り上げ，情報交換，学習に主眼を置いている。講演者は「第二稲毛ハイツ」の居住者による専門性の高い講座であるから説得力がある。

知っている人が 27%でほとんどの人がこの講座について知らない。知ってもらう工夫が必要である。同じハイツ住民相互による「学び」の場であるから bridging 効果が大きい。

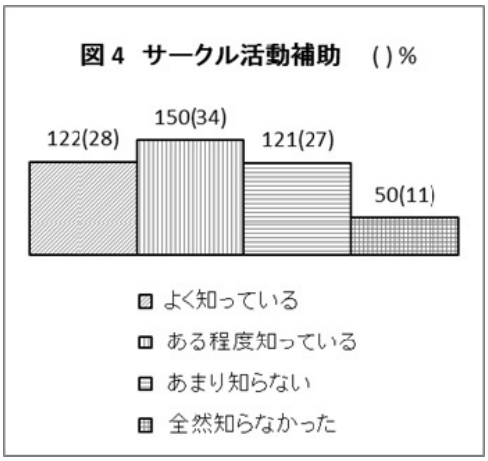
体験（実践）講座（図 3）も住民主体の活動の一つで，介護体験を実践を交えた学習講座で高齢社会にとっては誰もが体験しておく必要がある。

知っている人が 25%で，あまり知られていない

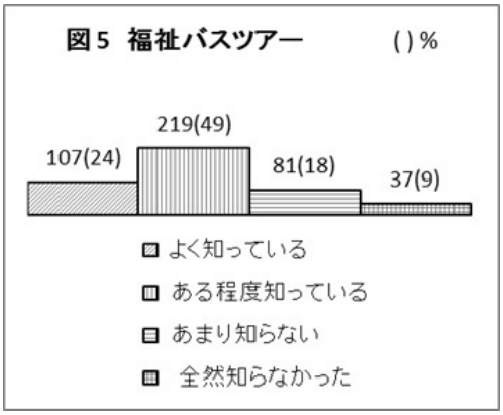
のが残念である。



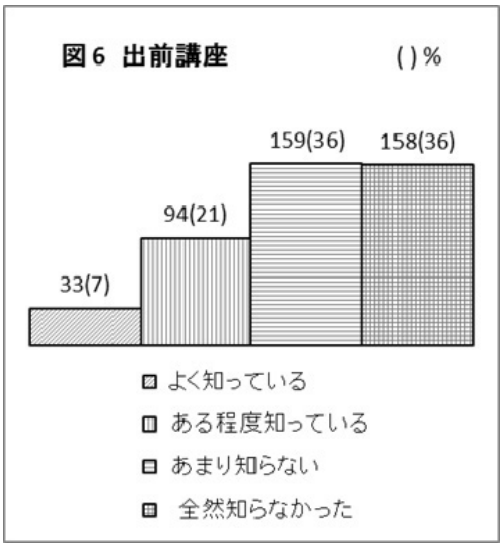
サークル活動に対して活動の補助金が出る（図4）。公平に扱われるので補助金は少ないが人数の多いところほど会費でまかなえるので元気がある。サークルのリーダー，活動家，インストラクターの紐帯手腕でもあろう。64%の人が承知しているが，もう少し多くの人にサークル活動に対して理解を求める方がよいだろう。「生き甲斐発見」「絆づくり」に対する貢献度が大きいのであるから人間形成に役立つはずである。



「福祉バスツアー」（図 5）は，千葉市の「老人福祉バス」を利用した 60 歳以上の方のツアーである。幅広い年齢層の人が老人ホーム，ハンディキャップを背負った人々が暮らす施設を訪問し，自分が今できること，心に願っていることをその人達と寄り添うことで感じ取る。それは，自分の人生をも振り返ってみるチャンスにもなるのである。また，そこから新しい自分なりの生き方が見えてくるだろう。子供にとっても「自分捜し」につながる。豊かな感性が育つことで社会貢献度は増すだろう。



知っている人が 73%と高いことは，福祉バスツアーの経験者が多い。それだけ関心があるということである。

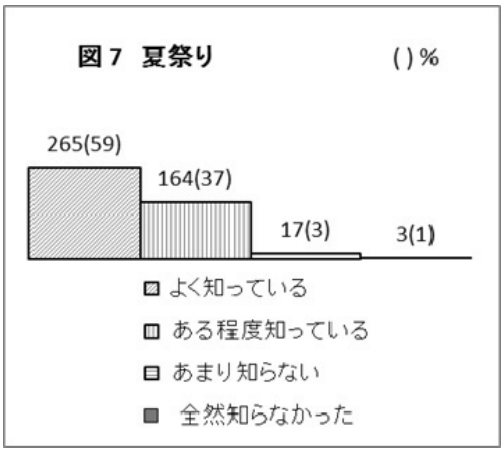


千葉市，消防署，警察等の「行政」に関する積極的な「出前講座」（図 6）で福祉的意味合いもある。安心･安全，　楽しく生きるためには様々な知恵が必要である。合理的な家庭生活の知恵から，情緒的，または知的学習の分野に広がり，絆づくりにも関わってくる。（小規模な紙芝居，俳句･短歌指導，読み聞かせスキル，パフォーマンス，料理，整理整頓のノウハウ等）寝たきり老人，体

の不自由な人，一人暮らしの人にとって優しい春風と桜の舞い，香りを届ける静穏な，生きる確信が持てる「出前講座」である。それは生活の知恵，生きる力につながるものであろう。

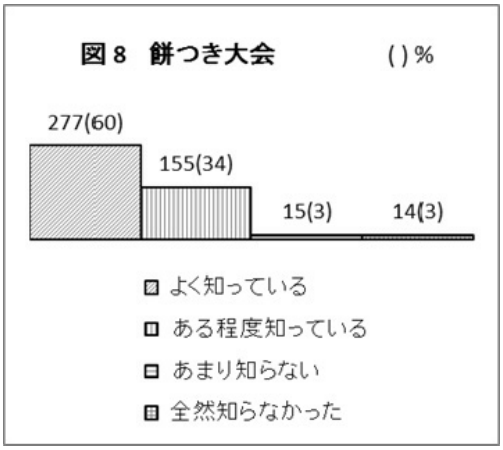
2.2　イベントについて

夏祭りはハイツ内で最大のイベントである。盆踊りが中心で，ハイツ周辺地域の参加協力を得て屋台，出店，クイズショウと，年齢に関係なく一夜を楽しめるイベントである。ハイツ周辺には保育園，幼稚園，小･中学校等多く存在し，子供達の楽しみの一つにもなっている。筆者も盆踊りに参加し，日本舞踊の会のメンバーが熱心に子供達に踊りを教えている姿に感銘を受けた。まるで仮装盆踊りのように様々な衣装で参加してくる人々にある種の創造性を感じられる。さすがに 96%と，人々が関心をもっていることがわかる。



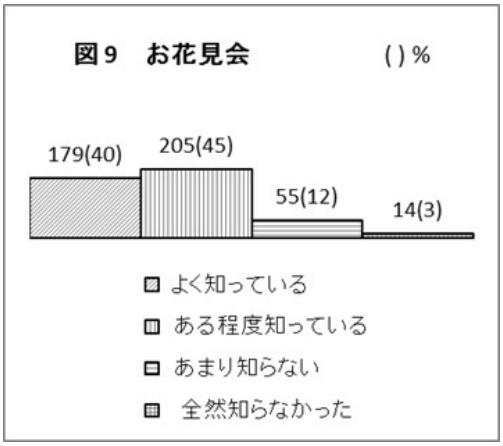
「夏」が夏祭りのイベント（図 7），「冬」は餅つき大会（図 8）である。このイベントは特に子供達に人気がある。人は美味しいものを食べている時が一番幸せな顔になれる。　幸せそうな顔を見ると自分も幸せな気持ちになる。そこに参加している実感と意味を認める「場」でもある。94%の人が関心をもち，何らかの形で参加しているのだろう。

イベントは計画・準備段階から世代間を越えての話し合いの場を持つことが必要である。具体的に段取りを決め，準備していく準備段階では特にコミュニケーションが大切である。協同，共同，共働，共生の大切さを学ぶよい機会でもある。終了後の徹底した片付け，環境整備，特にゴミ処理と清掃に関してはしっかりやることが次回のイベントの成功につながる。大人が手本を見せ，がんばりを見せることで子供たちは優しく，たくましく成長していく。



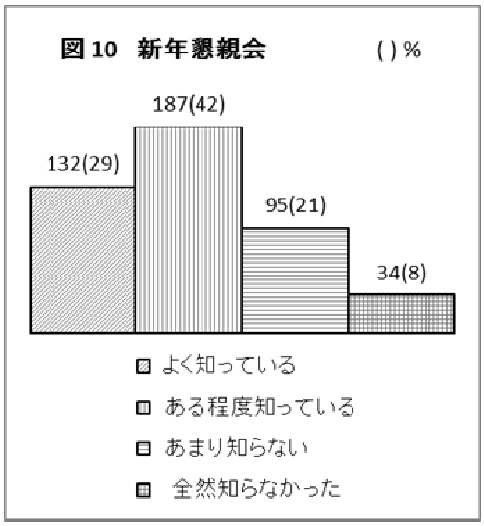
ハイツ内には見事な桜の木が沢山植えられている。草野水路沿いにも植えられていることから，提灯を飾れば素晴らしいお花見会（図 9）ができる。ハイツ内の住民は，それぞれの故郷に思い出をもつ人がいる。特に高齢者には自分の生まれ故郷を懐かしく思い出すよすがにもなるだろう。

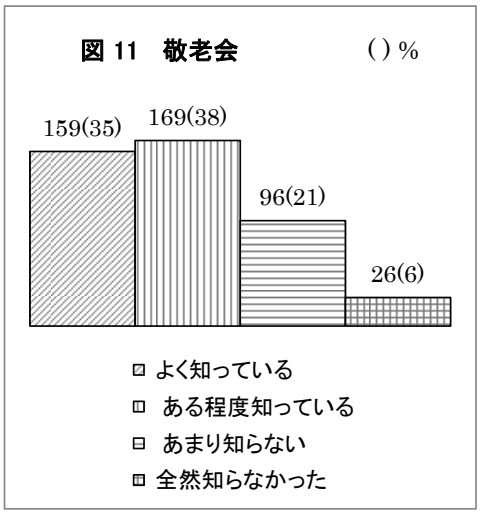
自然を大切に維持･管理することは大変な努力を強いられるが，季節の移り変わりから，光，色彩，香の変転を楽しめるのは，日本人の培ってきた伝統的な心のありようを確かめるよすがにもなる。ハイツはその点，理想的なコンパクト･シティづくりとしての環境に恵まれている方だろう。



日頃ハイツ内の仕事に関わって努力している人

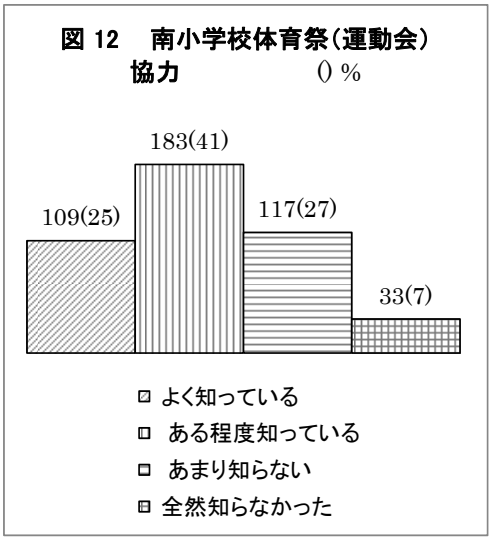
達に感謝とねぎらいの意味を込める。また，お互いの絆を深めるために集まっての新年懇親会（図10）を開く。飲食の他に，住民の「趣味の作品」展示も併用実施される。個人の個性の伸長，高揚感だけでなく，お互いが刺激し合えることから生きる活力も増してくるし，自分捜しの場にもなる。それぞれの棟の階段責任者，自治会役員，管理組合役員が集う。役員は持ち回りで，どの家庭でも経験することで，そのことはハイツの居住年数が高い人々はよく承知している。71%である。





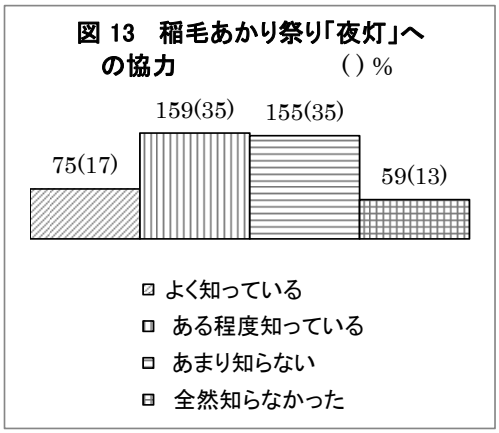
「老人」「高齢者」という言葉に反発する，又はしたい人は多い。特に平均寿命が延びるにしたがって，60 歳，70 歳は老人扱いされるのを嫌う。実際その年齢では，まだ元気で活躍している人が多いのが現実である。しかし日本の伝統的行事なので，ハイツでも「敬老会」（図 11）を催している。ただ記念として金品を送るのではなく，高齢者が集い特別企画の音楽や映画，落語等楽しむ「場」の設定は必要であろう。そのような催し物にしか参加しない人もいるからである。「敬老会」を福祉ではなくイベントに入れたのは，一般的にありがちな贈与で片付けるものではなく，ハイツ独特の楽しんでもらう「敬老会」を工夫したものであるからだ。

少子化が進む中で，ハイツ内の子供の数も減少している。世代間の交流，他民族，他文化交流が盛んなほど地域の活性化につながる。ハイツの側にある南小との交流は，運動会（図 12），夏祭り，あいさつ声かけ運動，セーフティウォッチャー，それらは，登下校だけでなく日常的に子供の安心・安全を守るために貢献している。高齢者にとってやりがいのある仕事だと理解している人は多い。66%の人は承知しているのである。

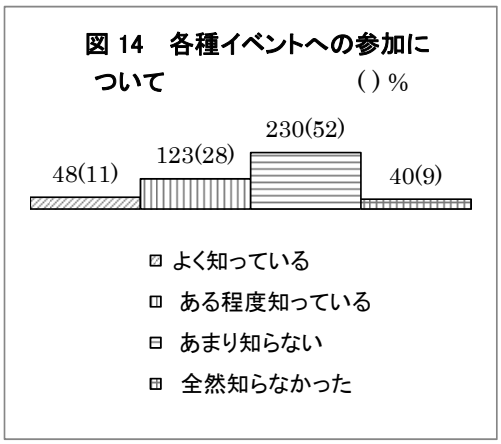


運動会は高齢者も一緒に楽しめる工夫が欲しいものである。見学場所と椅子などの設置方法などである。「高齢者が生き甲斐や喜び，悲しみを感じる時」は孫など家族との団欒，趣味のスポーツに熱中している時が多い。過去には仕事に打ち込んでいる時や，　旅行に行っている時が多かったが，最近ではアクティブシニアといわれているよ

うに，アグレッシブな活動に参加することを望む人が多くなっている。



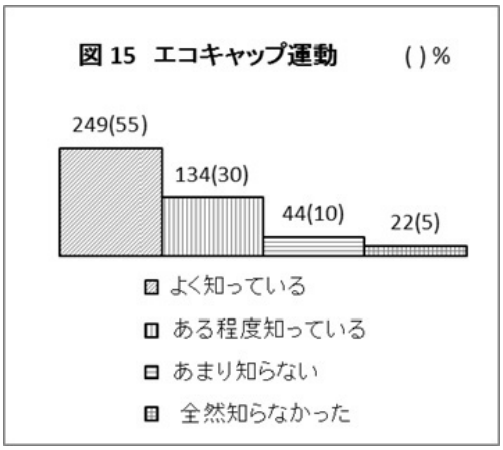
稲毛には有名な浅間神社があり，盛大なお祭り（図 13）が行われる。遠くからもお参りに来る人がいるくらいだから，ハイツの住民も熱くなるのだろう。「祭り」には一般的に思わぬ出会いがあるものだ。隣近所誘い合わせて参加し，顔見知りだと気軽に声を掛け合える「場」でもある。52%，住民の約半分は祭りを知っていて，参加の経験もあるだろう。



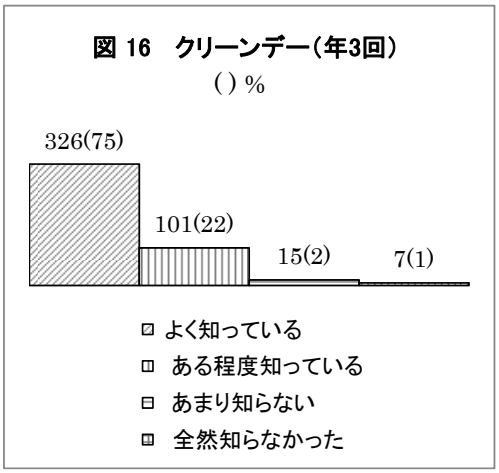
はっきりした各種イベント（図 14）への参加意志を持っている人は 39%止まりであり，61%の人が参加に積極的な意志を示していない。近隣同士が誘い合わせての参加につながるよう働きかけが必要となる。老若男女，子供にも強く印象づけられ，思い出に残るようなイベントそのものの工夫も大切になってくるだろう。

2.3　環境活動について

リサイクル運動の一つ，エコキャップ運動（図 15），クリーンデー（図 16）はハイツ内の環境を美しく保つためのもので，環境問題に対する住民の意識の高さを示すものである。



事務局前にボックスを備えつけて置き，集めたキャップは「世界の子供達にワクチンを寄贈し救済するのを目的にする」運動の一環で，運動にかかる全てのエネルギー資金，もちろん送料までハイツが負担する。(自治会費より)85%の協力が得られて持続している。



ハイツ内の清掃，樹木の剪定など全て業者に依託してやってもらっていたが，自治会，管理組合の活動が活発になるにつれて，1997 年頃から住民のボランティア活動家が清掃，剪定，植樹などをやるようになった。住民も積極的に参加するよう

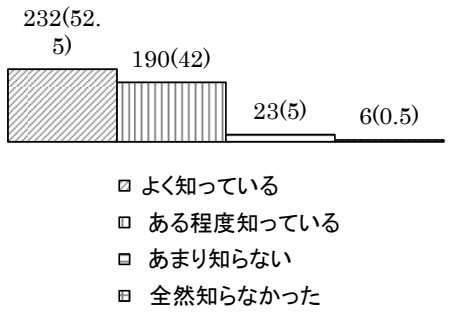
になり，子供達も自分たちの住環境に関心をもって手伝うようになった。

97%の人がハイツの環境整備に貢献する意志があるということだろう。

2.4　防犯対策

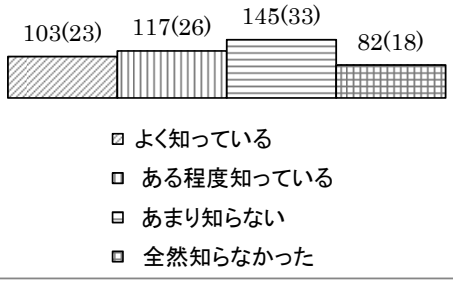
幹線道路から外れた静かな環境にあるが，それだけにパトロールなどの防犯対策（図 17）は必要になってくる。高齢者が多くなると益々必要性に迫られる。94.5%が防犯に対しての願望の強さの表れであろう。

図 17　防犯パトロール　( ) %



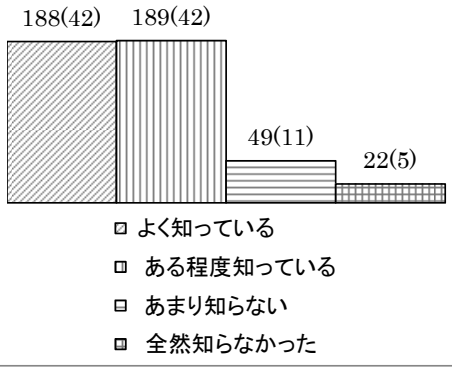
ハイツのすぐ近くにある南小学校に通う児童や幼稚園，保育園も近くにあることから，子供の安心･安全については自治会，管理組合が防犯パトロールと同じく力を入れてきた。高齢者のできる仕事にセーフティウォッチャー（図 18）があるので，「かけがえのない孫達の命を守る」気持ちで安心･安全に貢献してもらいたいものである。49%の認識では充分ではない。

図 18　南小セーフティウォッチャー
( ) %



あいさつ･声かけ運動（図 19）は防犯対策のためだけではない。福祉活動につながるものでもある。昔の人は，礼儀作法，いわば人が人として守らねばならぬ礼節の一つとして大切にしてきたものが挨拶であった。コミュニケーションの第一歩は挨拶から始まる。絆づくりの基本である。世代をつなぐもの，世代を越えてつなぐものの基盤をしっかりつくり上げていく大切な運動である。「挨拶一つもできない」人間が多くなってきているのは情けない話である。84%の意識を様々な行動･実践につないでいって欲しいものである。

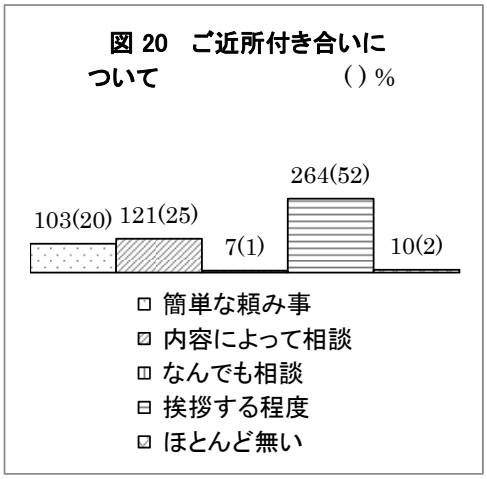
図 19　あいさつ･声かけ運動
( ) %



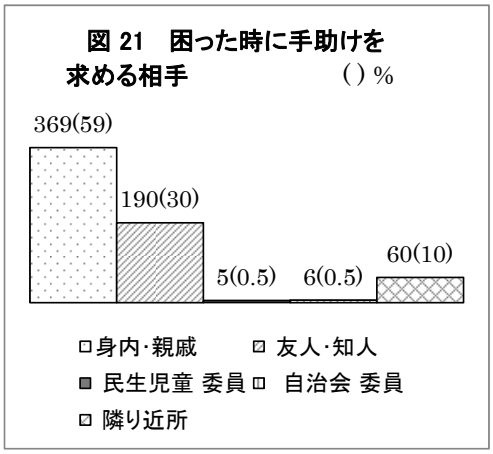
2.5　福祉

先に採り上げたあいさつ･声かけ運動で，「よく知っている」42%，「ある程度知っている」42%，「あまり知らない」11%，「全然知らなかった」5%で，　運動に関しての意識は 84%と高い水準にあるが実生活の中ではただ挨拶する程度 52%で，近所付き合いの実態が見えてくる。あと「一歩」が踏み出せない，勇気がいる。大切な「一歩」であることは認識していても「面倒くさい」，「まあいいか」で終わってしまう。

しかし，相談相手がいる人も 45%いることは絶望的ではない。「安心･安全なコミュニティづくり」に貢献してくれる人は存在するのである。一人暮らしの高齢者や高齢者のみの世帯の増加にともなって「ご近所付き合い」（図 20）の問題は益々大切な事項となっていく。

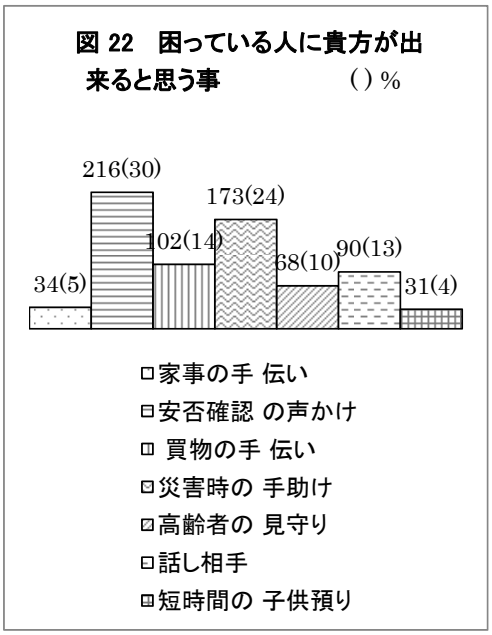


特に高齢者にとって気掛かりなのは，何か緊急のことが起こった場合，誰が自分たちを，自分を助けてくれるだろうかということである。この問いは“命”に関る問題なので分析結果について真摯に受けとめたい。身内･親戚が 59%と一番多いのは納得されるが，そうした人が遠くにいる場合緊急時にすぐ駆けつけることはできない。やはり「地域ケア体制づくり」（介護，在宅福祉サービスの提供と地域での見守り支援）は喫緊の問題となる。民生児童委員，自治会委員に対する期待感が少ないのは問題であろう。住民の意識はどうなのか。



住民は「困った時に手助けを求める相手」（図 21）のアンケート調査の結果によってもわかるように，緊急時対策には日頃から関心を持っていることがわかる。

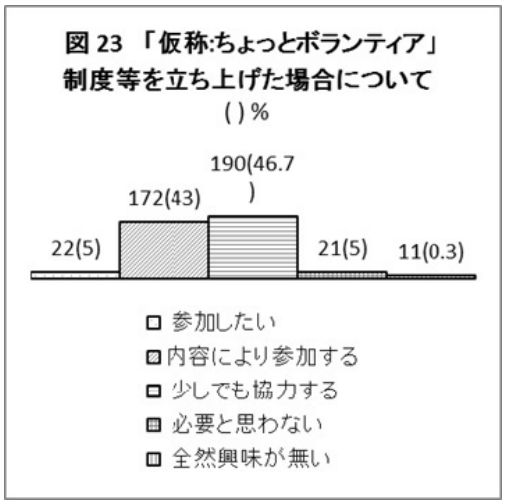
「安否確認の声かけ」「災害時の手助け」が，それぞれ 30%，24%で出来ると思う事の半分を占めているということは逆に「安否確認の声かけ」「災害時の手助け」を一番望んでいるということになる。



「困っている人に出来ると思う事」（図 22）については，「家事の手伝い」，「高齢者の見守り」が，それぞれ 5%，10%と低いのはプライバシー保護の壁が原因であること，「気を使うのが煩わしい，面倒，摩擦を避けたい」と思う心が働くからであろう。そのことは「短時間の子供預かり」が 4%と一番低い数値に呼応する。「元気でニコニコしている」時は，安らぎを覚え，幸福感に浸れるし，愛情も湧いてくるが泣かれたり，暴れ出したりしたらどうして良いか混乱してしまう。しかも大切な「命」に関わることでもあり，何かあったら責任をとりたくないと思うのが本音であろう。それでも，本音のところでは「人の役に立ちたい」という気持ちはあるのだ。

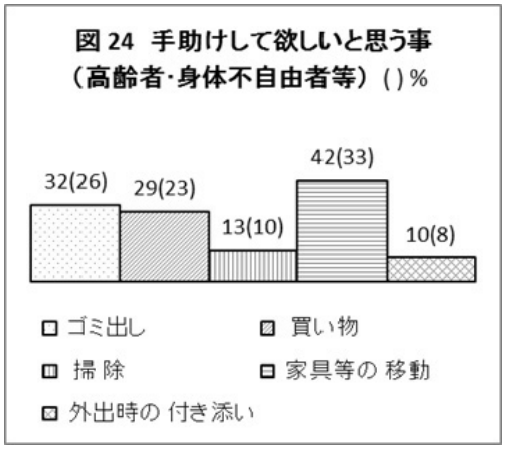
住民の気持ちとしては「ボランティア活動」（図 23）に約 95%の人が賛同するのである。そのエネルギーを生かしてこれまでより一歩踏み出し，より積極的な関わりを持つにはどうしたらよいか。住民の見守り体制の強化，情報の共有化，自治会，管理組合，民生委員活動の強化，ボランティア，NPO 活動の芽を育て拡大，充実させていくことなど様々な課題，取り組みについて支援の考察が必

要となってくる。まずは真摯に住民が何に一番支援を求めているのかを知ることが大切であろう。



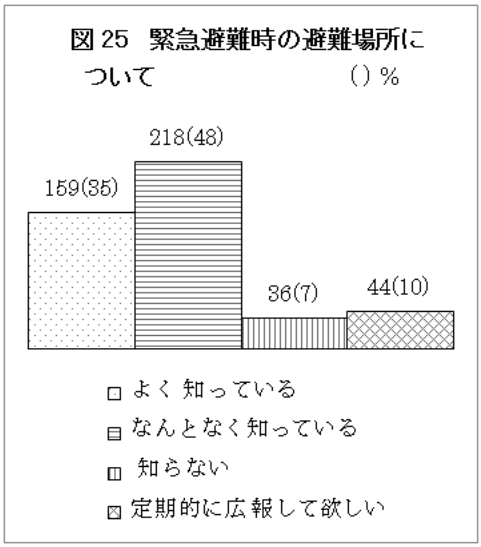
「手助けして欲しいと思う事」（図 24）については，高齢者･身体不自由者にとって，力のいる仕事は出来ない。家の中で杖をつくようになったり，車椅子になれば今まで障害にならなかった家具や道具が邪魔になってしまうことがある。毎日のことではないにしても，少しでも行動の自由を得たい気持ちは切実で,助けを求めたくなるであろう。

ゴミ出し，買い物，掃除，外出時の付き添いはほとんど毎日のことになるので，生活援助を目的に最低でもホームヘルパーの派遣は必要となるだろう。介護，在宅福祉サービスの提供と地域での見守り支援はしっかり充実させなければならない喫緊の問題である。

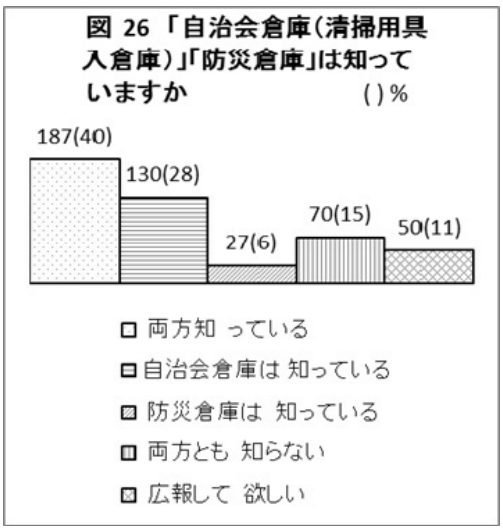


2.6 防災

防犯パトロールについての認識は 94%で高い。パトロールは，防犯だけを目的としたものではなく，防災も兼ねている。時には建物にクラックが入っているか，違法な廃棄物が置かれているかなどもチェックしているのである。それは，緊急避難時の対応を考えてのことでもある。

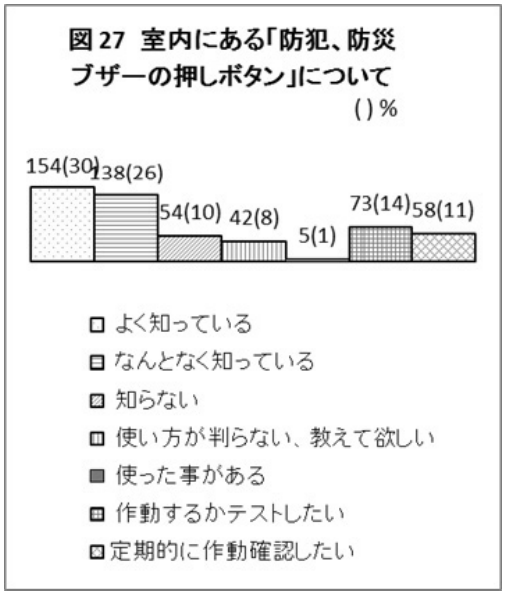


避難場所（図 25）を知っておくことは一番大切なことであり，「よく知っている」，「何となく知っている」で合わせて 83%では心許ない。住民全てが知っておくべきことである。



防災に関して、ハイツ内のどこに何が設置されているのか確認することは、いざという時に大切なことである（図 26）。それは自分だけの問題でなく、人助けにつながるものである。

「室内にある防犯，防災ブザーの押しボタン」（図 27）についても「よく知っている」30%，「何となく知っている」26%，合わせても 56%で約半分の人しか認識していないことになる。

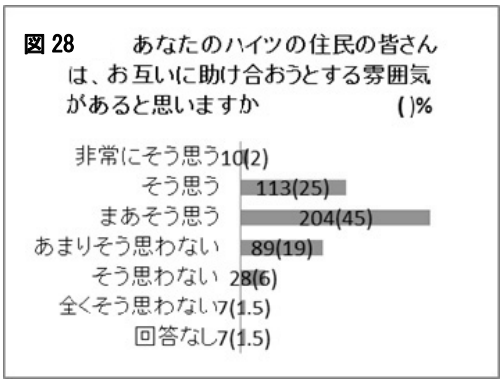


これから超高齢化社会に向かうのが確実であるのに，まだまだ空白の問題域が沢山ある。少なくとも自分たちの住んでいる地域に対して問題点を確認し，マップをきちんと描いて，どこが，何が空白であるかを明確にしていかねばならないだろう。筆者にとってもジェロントロジーが満たすニーズは何か再認識が必要であると考えている。

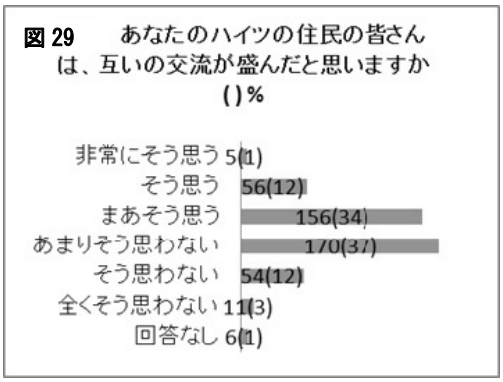
2.7　団地内の交流

アンケート問 1～問 3 までの回答は，ハイツ内での人と人との交流，コミュニケーション力，活力が問われる問いである。

「あなたのハイツの住民の皆さんは，お互いに助け合おうとする雰囲気があると思いますか」（図 28）の問いに対する回答は，「非常にそう思う」，「そう思う」から「まあそう思う」までを合計すると 72%となり，住民の 3 分の 2 程度は肯定的にとらえている。助け合いの気持ちはあるが，積極的に取り組む姿勢にはやや欠ける。「誘いがあれば乗るが，自分から名乗りをあげるのはどうも」というのが一般的であろう。そこから一歩を踏み出さなければ絆は生まれないし，人は育っていかない。

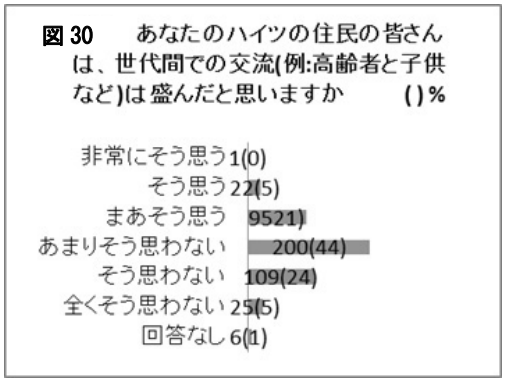


「あなたのハイツの住民の皆さんは，互いの交流が盛んだと思いますか」（図 29）の問いに対する回答は，非常にそう思う 1%，そう思う 12%，まあそう思う 34%，と全体で 47%で半分以下の人は，交流が盛んではないとハイツの情況を感じ取っている。築年数の新しい集合住宅ではますます「閉ざされた，内向き」の傾向がある。筆者の住むマンションでも築 10 年以上になるが顔見知りでも挨拶すらしない人が多く，閉ざされた，内向きのコミュニティの傾向がある。



「あなたのハイツの住民の皆さんは，世代間での交流（例:高齢者と子供など）は盛んだと思いますか」（図 30）それに対する回答は，非常にそう思う 0%，そう思う 22%，まあそう思う 21%で，これまた肯定的にとらえている住民は 43%で半分にも満たない。

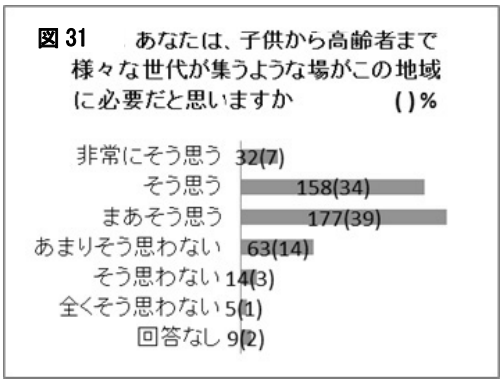
問 1～問 3 は，このアンケートでも最も重要な問いで，　それはハイツの仕組みを変え，安心･安全，持続可能な理想的環境をコミュニティ全体でつくっていくことを目的とした，社会的支援の在り方の考察のテーマの基盤となるものである。閉ざされた地域から開かれた地域への試みは，稲毛ハイツだけの問題ではないからだ。稲毛ハイツの試みが良き先行例となって周りのコミュニティづくりの参考となり，そこから全国へ波及すれば理想である。「アンケート実施はその第一歩」と位置づけられる。



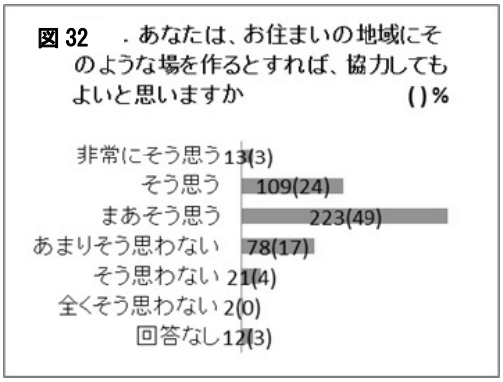
問 4～問 8 は，「場」の設定に関しての質問で，現在ハイツ内に子供から高齢者まで様々な世代が集えるような場所がない。現在あるのは築 35 年を越えている 2 階建て一棟だけである。一階は事務所になっているが 3 室あり，サロン，和室になっている。多目的に使える部屋は二階に 4 室ある。15 畳の部屋一つは使い易い。多様なサークル活動，多目的に使用のできる大ホールがあるとよいだろう。

理想的な環境をコミュニティ全体で作り，住み慣れた第二稲毛ハイツ内でいつまでも安心･安全が保証され，自分らしく生きる「Aging in place 」を実現することを目的とする「場」づくり。それに対するアンケート調査の問いが 4～8 である。

「あなたは，子供から高齢者まで様々な世代が集えるような場がこの地域に必要だと思いますか」（図 31）という問いに対する回答は，多くの高齢者が 60 歳を過ぎても健康で，知識も技術もネットワークもある人々が多いことが 1～3 の質問でもわかるように，多くの人が何かやることがあればしたいと思っているのに，何をしていいのかわからない，踏み出せる機会がない。手助けしてくれる人もいない。意志や意欲があるのにそうした高齢者をそのままにしておくと，次第に引きこもりがちになり，小さな夢や希望さえも失われ，健康までも損なわれてしまう。最終的には孤老死にもなりかねない。知識や経験だけでなく，健康で意欲的な高齢者は社会にとっても貴重な存在（資源）でもある。活用しない，できないのは社会的な損失といわざるを得ない。一方，少子化プラス母親の就労からくる子育て問題は深刻になっている。コミュニティ全体で二つをマッチングさせ活用できる「場」づくりは益々重要な課題となってくるだろう。4 の回答で，非常にそう思う 7%，そう思う 35%，まあそう思う 39%で，肯定的回答が 81%である。そのことは目指すコミュニティづくりの可能性を示唆するものである。

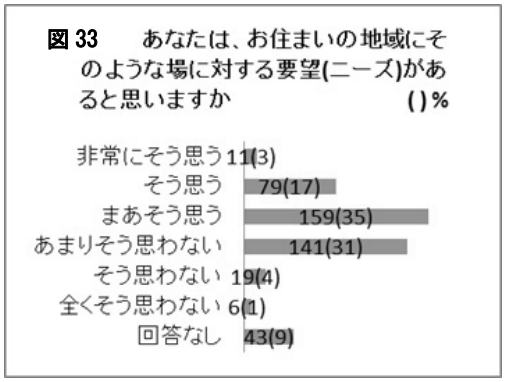


「あなたは，お住まいの地域にそのような場を作るとすれば，協力してもよいと思いますか」（図 32）の問いに対する回答でも，非常にそう思う 3%，そう思う 24%，まあそう思う 49%で，理想的な場づくりに対して肯定的回答は 76%で，協力する意思があることを表明している。

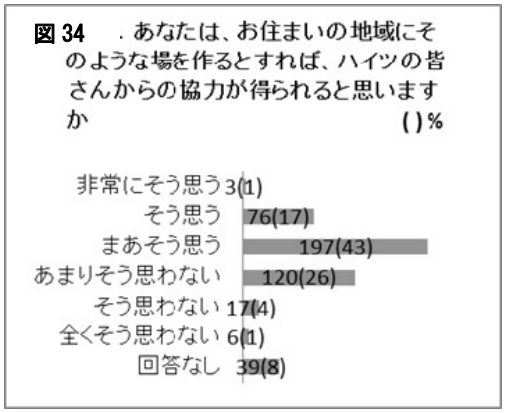


「あなたは，お住まいの地域にそのような場に

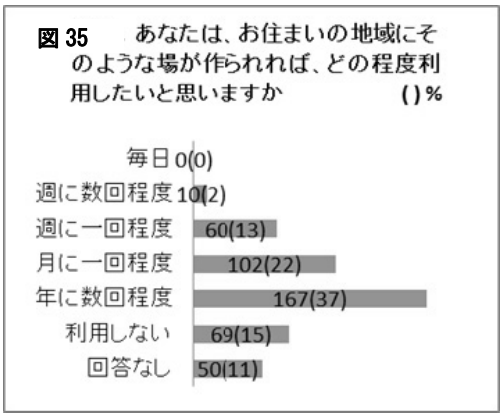
対する要望（ニーズ）があると思いますか」（図33），「場づくり」に対しての説明は委員の人には理解してもらえたが，全住民に対しては説明不足のところがあったと思う。それでも，非常にそう思う 3%，そう思う 17%，まあそう思う 35%で，肯定的回答は 55%と半分の人は“場”の設立を希望していることになる。



「あなたは，お住まいの地域にそのような場を作るとすれば，ハイツの皆さんからの協力が得られると思いますか」（図 34）の問いに対する回答は，非常にそう思う 1%，そう思う 17%，まあそう思う 43%で，61%の人が協力的であると肯定的回答をしている。これはハイツ内に住む人間関係が良いことを示すものであろう。高齢者のため，子供，両親のためというより，一人一人の住民のために絆づくりは大切であることを，ハイツの住民も理解していることがうかがえる。



「あなたは，お住まいの地域にそのような場が作られれば，どの程度利用したいと思いますか」（図 35）について，筆者はこの問いが具体性のないものであったと反省している。人材育成問題においても「場づくり」の大切さ，目的はわかっても，具体的な設計がなされていないと理解しにくい。例えば，「場づくりの設定」としての問題点，（ハイツの抱える課題）住宅地の概要と計画所在地，事業の概要，計画上の要点，他地域のモデル事例。特に，他地域のモデル事例をきちんと示すべきであった。モデル事例，先行研究を含めての研究が今後の筆者自身の課題である。



毎回 0%，週に数回程度 2%，週に 1 回程度 13%，月に 1 回程度 22%，年に数回程度 37%，利用しない 15%，回答なし 11%，この数値の結果から筆者が曖昧な問いを発したことを大いに反省している。男性の 60 代～90 代は 128 名，女性は 162 名。一般的に女性の方が長生きであることから，ハイツでも高齢の女性が多い。60 代以上の高齢者は 290 名で 63%。　益々高齢社会を迎えることになる。特にこれから増えていくだろう。一人住まいの高齢者をどのようにサポートすることができるか。収入，貯蓄のなくなった高齢者の支援は重要になるだろう。国の助けを当てに出来ない現在では尚更である。

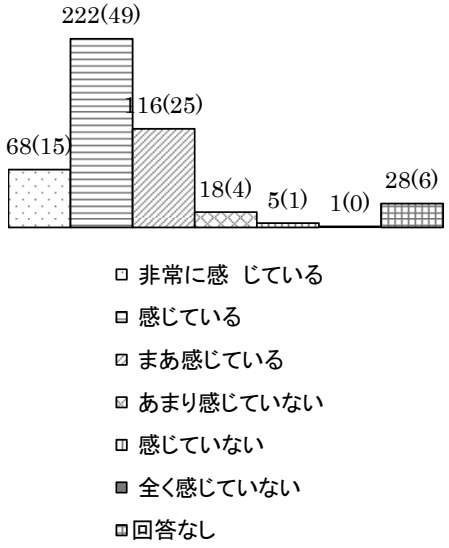
住居の確保，生活保護申請，訪問活動，金銭管理，室内外の整理･整頓，生活支援，健康相談，入院の付き添い，話し相手，相談相手など，民生委員だけに頼れない。ハイツから孤老死者を出さないための工夫を自治会，管理組合を中心に住民皆で考える必要があるだろう。いかに人生の最後を迎えるか，どのような最後を迎えるか，人生を振り返り，確認し，統合する作業，そのプロセスをともに過ごし，その時を共有することこそが，支援の本筋だと思う。支援者としての心構えの一つとして，ある本の中に「どう生きるかとともに，

どこで死ぬのか，　どんなふうに最後を迎えるのか，更にいうならば，誰がそこに居るのか，そこの場に無心で関わり寄り添うこと」とあるが，同様のことを自治会長が考えているところは頼もしいが，実践段階で多くの問題が浮上してくるだろう。

「現在お住まいのハイツでの居住年数を教えて下さい」の問いに対する回答は，11 年以上が 70%以上である。その居住歴が次の問いの回答に心情としてつながっている。

「あなたは，現在お住まいのハイツに愛着を感じていますか」（図 36）に対する答えは，肯定的回答は 89%にもなる。これほどの数字になるのは珍しいのではないか。人は誰も，自分の最後を愛着を感じている地で迎えたいと思うだろう。ならば，益々第二稲毛ハイツが「Aging in place 」でなければならない。

図 36　現在お住まいのハイツに愛着を感じていますか　( ) %



2.8　住民の要望

福祉に関する要望は，以下の通りであった。

1) 希望者がいるならば，「高齢者，障害者，乳幼児など」手助けを必要とする方への「互助会」のような活動がほしい。
2) 超高齢者(例えば 90 歳以上)との関係を民生委員に任せっきりにしないで，サークルで援助，お世話するシステムをつくる。
3) 介護ボランティアをしてもよいと思ってもきっかけが難しいし，責任を持って出来るか心配である。
4) お年寄りの方に助け合いの絆があるとよいと思う。
5) 家族に身体不自由者がいるため，緊急時(例:家の中で転んで起こせない時など)に助けて頂ける連絡先があれば助かる。
6) 将来，独り暮らしの高齢者が増える。家事協力するボランティア組織を考えられたらよいと思う。
7) 高齢のため古新聞の処分に困っている。玄関まで取りに来てくれると助かる。
8) 高齢者が多く，「ちょっとボランティア」専有部分の手助け等，必要に迫られている人が多い。
9) 高齢者対策を早く企画実行してほしい。
10) 高齢者の社交場づくり，ふれあいサロンの一層の活発化。
11) 問題別ネットワークづくり―当面高齢独居者対象を検討されたい。
12) 病気及び高齢のため「手助けして欲しいと思う事(高齢者，身体不自由者等)」とあって，実際助けて頂ければ有り難い。
13) 以前，介護の講座の時，都合が悪くて出席できなかったが，参加した人々は大変わかりやすく，ためになったと話している。再度計画して欲しい。
14) 第二稲毛ハイツに高齢者の方が多いが，5 階建てでエレベーターがない。設置は考えているのか。自治会の会議で議題になるだろう。

高齢者が最後まで自宅で生活できる「Aging in place」という将来ビジョンは，前述のようにこれからの社会にとって極めて重要である。稲毛ハイツ全体が一つのライフ･イノベーションとして機能することが大切であろう。アンケートに対する解決のためには，住民が日常生活に何らかの支障が生じた時に，程度に応じて一貫した在宅治療･訪問看護のサービスが受けられ，医療･看護･看取りまでのケアサイクルがシームレスに行われる地域の社会システムの構築が大きな課題となるだろう。

医療も「病気を治す医療」から「(生活を)支える医療」に変わっていく必要があり，家族介護から社会介護へ， 病院･施設から在宅へという流れが必要なのである。そのために稲毛ハイツも在宅ケアシステムの地域的･面的展開が必要で， 仕組みとしては，① 通所介護，② 訪問介護，③ 配食サービス， ④ 生活支えボランティアを効率よく提供するための，一種の「避難所」的施設が出来れば望ましい。

次に，子育て支援に関する要望である。第二稲毛ハイツには，若い夫婦者が少ない。当然そうした人々に対するケアの体制は整っていない。

1) 子育てサークル(子育てママの集い)など,創って頂きたい。これを充実させれば若い世帯も入居して下さるのではないでしょうか。
2) 只今，初めての子育て中ですが，ハイツ内のママ友がいません。同じくらいの子供を持つ方や子育て中のママ交流できるシステムがないので残念です。集会所などで子育て支援館のような場所や最近のマンションによくあるキッヅルームみたいな場所があればいいのになあと思います。
3) 子供達が参加できるツアーの実施。
4) 「子供会」の設立。

3　まとめと考察

第二稲毛ハイツでは，今回の 3.11 東日本大震災直前に，10 年に一度の大規模改修工事が完了した。その後のハイツ内点検においては特別問題になるところもなく，液状化の影響も比較的少なく済んだ。震災後の自治会，管理組合の対応も素早かった。アンケート調査の分析から見えてきたもの，今後の課題を通して考察すると

第 1 に，災害時に高齢者が一貫した在宅治療，訪問看護のサービスが受けられ，医療・看護・看取りまでのケアサイクルがシームレスに行われる地域社会システムの構築が課題として取り上げられる。稲毛ハイツ内の人的資源の発掘により，若者を育成する施設をハイツ近くの病院と連携してつくる必要があるだろう。

第 2 に，第二稲毛ハイツには若い夫婦者が少ない。若い夫婦が安心・安全，喜んで住めるよう育児サービス，ケアの充実と「ママ友」が出来るような「場」の設定，人材が必要である。「育メン」，「育ジイ」，「育バア」の活動はこれからの課題である。人材発掘と人材育成には多くの住民の知恵と行動が必要である。課題として取り組んでいかねばならないだろう。ハイツの回りに幼稚園はあるが，一カ所しかないことから入園待ちが続いている。保育所も元薬局であったところを改造してつくられたもので，広さとしては充分でないため入れる乳幼児に限界がある。

第 3 に，環境整備はよく整っている。外来者としての印象はいつ訪れても，季節の花が咲き乱れていて楽しめるし，ゴミ処理がきちんと出来ているため清潔感を印象づける。ただし，美化に携わっている人間が高齢者ばかりであることが問題であり，子供から青年，壮年，老人まで幅広い参加につなげていくことが今後の課題となるであろう。

第 4 に，稲毛ハイツは「第七ハイツ」まであり，コンパクト・シティとしては充分な規模であるが，互いの関係性は必ずしもうまくいっているとは思えない。いつでも話し合いのもてる空間として，千葉県柏市高柳地区の考えている「鎮守の杜構想」―いわゆるコミュニティ・カフェのような「場」の設定が必要である。構築に向けてのコーディネーター，ファシリテーターの役割を担う人がいるのか，適任の人材育成に関する課題は各方面で浮上してくるだろう。アンケート調査においても，住民の半数以上が多目的利用の出来るゆとりある空間の建造物の設置を望んでいる。

第 5 に，第二稲毛ハイツの近くに幼稚園，小学校，中学校があることで，自治会，管理組合はそれぞれの学校と連携しながら，協力してやれることを行っている。例えば「小学校」の入学式，卒業式に必ず自治会長が出席する。地域の話し合いを学校で行う(特にイベント参加に関する様々な規定などを話し合う)。ただし，全てのハイツがそのように連携しているのではない。どのようにブリッジングしていくか，これからの課題である。

例えば，千葉県柏市高柳地区では，地域のイベントの一つ「高柳秋まつり」では，地域の学校の生徒の作品，研究成果の発表の場をつくり，

地域の人々に公開して好評を得ていた。特に高齢者は日頃なかなか学校訪問の機会がない上に，子供たちとのつながりを持つ場も少ないため，現実に子供たちがどのようなことを学校で学んでいるのか認識がなく関心も薄かったようだが，自分たちの子供時代と比べての格差に非常に驚かされたようである。

テレビ，ラジオ，新聞，雑誌などでわかっていたつもりであっても，現実を目前に見せつけられると認識以上に新たな刺激となるのである。(小学校 5～6 年生が「液状化」について調べ，実験したことが報告されていた。写真や図解でわかりやすく工夫されてもいた。)

アンケート調査に関して，羅列的なアンケート調査になってしまったが，次回のアンケート調査では設計段階から，明らかにすべき目的に応じた階層化や構造化がなされるよう配慮したい。

注

[1] 2010 年厚生労働省まとめ，2010 年 9 月 20 日発表。

[2] 2010 年万引の疑いで逮捕･書類送検された 65 歳以上の高齢者は 27,362 人，警視庁まとめ 10.11.27 発表。

[3] 東京多摩ニュータウン 1964～2000，大阪千里ニュータウン 1964～1969，愛知高蔵寺ニュータウン 1965～1985，茨城筑波研究学園都市 1968～1998 等。

[4] 広井良典『定常型社会』岩波新書，2009. 同『コミュニティを問いなおす』ちくま新書，2010. 同『ケアを問いなおす』ちくま新書，2009. 同『死生観を問いなおす』 ちくま新書，2009. 同『ケア—越境するケアへ』医学書院，2000. 同『持続可能な福祉社会』ちくま新書，2010. 同『医療・保険改革の構想』日本経済新聞社，1997. 同『日本の社会保障』岩波新書，1999. 同『生命の政治学—福祉国家･エコロジー生命倫理』岩波新書, 2003.

[5] 鎌田実「地域医療最前線（4）高齢化社会の地域ケア」，『治療』 79(6) p.1516-1520. 東大高齢社会研究機構 1997. 同「バリアフリーモビリティの現状と展望」，『自動車技術』60(3), 2006, p.2-7. 同「鎌田実教授が語る、東京大学の『未来づくり』」，東京大学高齢社会総合研究機構，『2030 年超高齢未来』 東洋経済新報社，2010, p.58-67.

[6] 秋山弘子「日本の老年社会科学から欧米へ向けての発信」，『老年社会科学』22(3), 2001, p.338-342. 同「長寿時代の科学と社会の構想」，『科学』 80(1) , 2010, p.59-64.

[7] 辻哲夫『日本の医療制度改革がめざすもの』時事通信出版局，2008. 同「辻哲夫教授が語る、長寿社会の『医療』」，東京大学高齢社会総合研究機構，前掲， p.82-89.

[8] 村嶋幸代 「海外文献紹介 東京大学医学部地域看護学教室からの発信—23—高齢者へのアセスメント介入の結果—ランダム割り当てによる 3 年間の試行」，『保健婦雑誌』53(11), 1997, p.928-932. 同「高齢社会における訪問看護の役割と課題—効果的な在宅ケアの提供を目指して」，『老年社会科学』20(1)，1998, p.16-24. 同「村嶋幸代教授が語る、長寿社会の『看護』」，東京大学高齢社会総合研究機構，前掲，2010, p.90-99.

[9] 藻谷浩介『ニッポンの地域力』日本経済新聞出版社，2007. 川野佐一郎『市民主体の地域社会教育』国土社, 2009.

[10] 川渕孝一『日本の医療が危ない』ちくま新書，2009, p.42-78.

[11] 西村周三『医療と福祉の経済システム』ちくま新書，2009, p.62-93.

[12] 小沢修司『福祉社会と社会保障改革—ベーシックインカム構想の新地平』高菅出版，2002, p.53-72.

[13] 岩本康志「岩本康志教授が語る、長寿社会と『経済』」 東京大学高齢社会総合研究機構，前掲，p.142-149.

[14] 樋口範雄「樋口範雄教授が語る、長寿社会の『法律』」 東京大学高齢社会総合研究機構，前掲，p.134-141.

[15] 大月敏雄「大月敏雄教授が語る、長寿社会の『まちづくり』」，東京大学高齢社会総合研究機構，前掲, p.110-120.

[16] 牧野篤『シニア世代の学びと社会』勁草書房，2009. 同「牧野篤教授が語る、長寿社会の『学び』」，東京大学高齢社会総合研究機構『2030 年超高齢未来』東京経済新報社，2010, p.121-130.

第 2 稲毛ハイツ　居住者の皆様へ

平成 22 年 8 月 吉日

自治会活動アンケートのお願い

第 2 稲毛ハイツ自治会では『平成 22 年度活動方針』を検討するに当たり、皆様のご意見を今後の自治会活動に参考としたいと思いますのでアンケートにご協力ください。

アンケートは 2 枚です

「第 2 稲毛ハイツ自治会活動」に関するアンケート調査　　1 枚（両面 2 ページ）

「多世代交流型コミュニティ」に関するアンケート調査　　1 枚（両面 2 ページ）

注記:「多世代交流型コミュニティ」に関するアンケート調査は外部機関（東京大学大学院教育学研究科）との合同アンケートになります。

提出方法

この封筒に入れて「階段委員」または「管理事務所」へ提出して下さい。

提出は 9 月 6 日 （月）までにお願い致します。

※　階段委員さんへ　　皆さんから提出されましたアンケート用紙（封筒ごと）、管理事務所までお届けをお願い致します。

第 2 稲毛ハイツ管理組合自治会

第2稲毛ハイツ自治会活動　アンケート

●自治会では、下記のような活動（主だったもの）を行っています。
１～４の該当する番号に〇印をつけて下さい。

※毎週火曜日午前10時～15時まで、管理棟1階サロン（図書室）にて開催
※ハイツにお住まいの方（ハイツ外の友人同行可）の日常の情報交換、相談窓口（介護、高齢者対応等なんでも）の交流の場となっています。

人文講座	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
出前講座	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
体験（実践）講座	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
福祉バスツアー	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
夏祭り	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
もちつき大会	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
新年懇親会	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
お花見会	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
敬老会	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
エコキャップ運動	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
あいさつ・声かけ運動	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
稲毛あかり祭り『夜灯』への協力	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
防犯パトロール	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
南小体育祭（運動会）協力	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
南小　セイフティウォッチャー	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
サークル活動　補助	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
「クリーンデー（年3回）」	1	良く知っている	2	ある程度知っている	3	あまり知らない	4	全然知らなかった
各種イベントへの参加について	1	できるだけ積極的に参加する	2	興味の有るイベントは参加したい	3	日時の都合がつけば参加したい	4	全然興味が無い

●上記以外の自治会活動で「やってみてはどうか」とか「有れば良いな」と思う事が有れば箇条書きしてください。

裏面に続く

第2稲毛ハイツ自治会活動　アンケート　その２

●こちらでのアンケートは日常生活についてお聞きいたします。
該当の番号に〇印をつけて下さい。（複数可）

ご近所付き合いについて

	1	簡単な頼み事	2	内容によって相談	3	なんでも相談	4	挨拶する程度	5	ほとんど無い

困った時に手助けを求める相手

	1	身内・親戚	2	友人・知人	3	民生児童委員	4	自治会委員	5	隣り近所

手助けして欲しいと思う事（高齢者、身体不自由者　等）

	1	ゴミ出し	2	買い物	3	掃除	4	家具等の移動	5	外出時の付き添い

困っている人に貴方が出来ると思う事

	1	家事の手伝い	2	安否確認の声かけ	3	買い物の手伝い	4	災害時の手助け	5	高齢者の見守り
	6	話し相手	7	短時間の子供預かり						

お互いさまの心で、ふれあいと支えあえるハイツづくりをめざし「高齢者、身体の不自由な方、子育て中の方たち」などが、お困りの時に助け合い支援活動として『仮称：ちょっとボランティア』制度等を立ち上げた場合について

	1	参加したい	2	内容により参加する	3	少しでも協力する	4	必要と思わない	5	全然興味が無い

緊急避難時の避難場所について

	1	良く知っている	2	なんとなく知っている	3	知らない	4	定期的に広報して欲しい

室内に有る「防犯、防災ブザーの押しボタン」について

	1	良く知っている	2	なんとなく知っている	3	知らない	4	使い方が判らない、教えて欲しい
	5	使った事が有る	6	作動するかテストしたい	7	定期的に作動確認したい		

第2稲毛ハイツの「自治会倉庫（清掃用具入倉庫）」「防災倉庫」は知っていますか

	1	両方共知っている	2	「自治会倉庫（掃除用具入倉庫）」は知っている				
	3	「防災倉庫」は知っている			4	両方共知らない	5	広報して欲しい

●上記以外のアンケートで「やってみてはどうか」とか「こうして欲しい」と思う事が有れば箇条書きをしてください。

以上です、ご協力有難う御座いました

「多世代交流型コミュニティ」に関するアンケート調査

記入上のお願い

この調査票は、**第二稲毛ハイツの住民の皆様**にご記入をお願いしています。
調査票は全部で両面２ページです。選択肢があるものはあてはまる番号を**1つだけ選び**
その番号に○をお付け下さい。（　　）には、具体的な数字をご記入下さい。
この資料は、研究以外の公の場所では一切公表いたしません。

問１．あなたのハイツの住民の皆さんは、お互いに助け合おうとする雰囲気があると思いますか。

１．非常にそう思う	２．そう思う	３．まあそう思う
４．あまりそう思わない	５．そう思わない	６．全くそう思わない

問２．あなたのハイツの住民の皆さんは、互いの交流が盛んだと思いますか。

１．非常にそう思う	２．そう思う	３．まあそう思う
４．あまりそう思わない	５．そう思わない	６．全くそう思わない

問３．あなたのハイツの住民の皆さんは、世代間での交流（例：高齢者と子供など）は盛んだと思いますか。

１．非常にそう思う	２．そう思う	３．まあそう思う
４．あまりそう思わない	５．そう思わない	６．全くそう思わない

問４．あなたは、子供から高齢者まで様々な世代が集うような場がこの地域に必要だと思いますか。

１．非常にそう思う	２．そう思う	３．まあそう思う
４．あまりそう思わない	５．そう思わない	６．全くそう思わない

※　以下の設問（問５～問８）の「そのような場」とは『子供から高齢者まで様々な世代が集うような場』のことを指します。

問５．あなたは、お住まいの地域にそのような場を作るとすれば、協力してもよいと思いますか。

１．非常にそう思う	２．そう思う	３．まあそう思う
４．あまりそう思わない	５．そう思わない	６．全くそう思わない

問６．あなたは、お住まいの地域にそのような場に対する要望（ニーズ）があると思いますか。

１．非常にそう思う	２．そう思う	３．まあそう思う
４．あまりそう思わない	５．そう思わない	６．全くそう思わない

問７．あなたは、お住まいの地域にそのような場を作るとすれば、ハイツの住民の皆さんからの協力が得られると思いますか。

１．非常にそう思う	２．そう思う	３．まあそう思う
４．あまりそう思わない	５．そう思わない	６．全くそう思わない

問８．あなたは、お住まいの地域にそのような場が作られれば、どの程度利用したいと思いますか。

１．毎日	２．週に数回程度	３．週に１回程度
４．月に１回程度	５．年に数回程度	６．利用しない

問９．　性別を教えて下さい。

１．男性　　２．女性

問１０．年齢を教えて下さい。

（　　）歳

問１１．現在お住まいの稲毛ハイツでの居住年数を教えて下さい。

（　　）年

問１２．あなたは、現在お住まいのハイツに愛着を感じていますか。

１．非常に感じている	２．感じている	３．まあ感じている
４．あまり感じていない	５．感じていない	６．全く感じていない

以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。

自治会活動アンケート時の提案等　　第 2 稲毛ハイツ管理組合

自治会

福祉関連

・希望があるならば「高齢者、障害者、乳幼児など」手助けを必要とする方への『互助会』のような活動

・超高齢者（例えば 90 歳超、或いは 100 歳超）との関係を民生委員に任せっきりにしないで、サークルで援助お世話する。

・『仮称:ちょっとボランティア』の中で〔2・内容により参加する〕については、同じ悩みを持つ人：介護保険（要支援、要介護の人、入院している人、などを用いている人等）同士の集まりなら

・ちょっとボランティアについて、④必要と思わない、⑤全然興味が無い訳でもありませんが、今協力できるかと言われると責任もって、YES と言える自身が無いというのが正直な感想です。

・お年寄りの方に助け合いが有ると良い。

・家族に身体不自由者がいる為、緊急時（ex　家の中で転んで起こせない時など）に助けて頂ける連絡先が有れば助かります。

・将来、独り暮らしの高齢者が増える、家事協力するボランティア組織を考えられたら。

・高齢の為、古新聞の処分に困っております、玄関まで取りに来てくれると助かります、1 人では無理ですので、何か名案がないでしょうか。

・高齢者が多く、ちょっとﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ、専有部分の手助け等、必要に迫られている人が多い、早く企画実行すべきである。

・高齢者の社交場作り、ふれあいサロンのいっそうの活発化。

・問題別ﾈｯﾄﾜｰｸ作り…当面高齢独居者対象を検討されたい。

・病気及び高齢の為、問 3 項目「手助けして欲しいと思う事(高齢者、身体不自由者等)」があれば助かります。

・以前介護の講座の時、都合が悪くて出席できませんでした、参加した方がとても良かったと話しておりました、また計画して頂けたらと思っています。

・第 2 稲毛ハイツは高齢者の方が多いがエレベータ設置とか考えているのか、現在工事中だが自治会の会議では議題にもなかったのか、このままでは 10 年もしたら空家だらけになる。

防災関連

・防災ブザーの設置、もっと目立つ所に取り付けて欲しい、それから玄関脇についている防災ランプ金属の部分が錆びていて実際に点灯するのかも調べて欲しい。

・災害時用の食料、飲水は個人で備蓄するように奨励して下さい。

・防災ﾍﾙﾒｯﾄは世帯で一つでなく、家族人数分配布して頂きたい(管理費の意味を再確認して欲しい)住民の安全を第一に考えて頂きたく、何卒宜しくお願い致します。

・「防犯、防災ﾌﾞｻﾞｰの押しボタン」一度作動するか試しに押した事がありますが、階段の防災ﾌﾞｻﾞｰが錆びていたため止まらず困った事がありました、幸いﾊｲﾂの方で外を通りかかった方にお願いして止めて頂きました。

・防災井戸の場所は知っているか。

子育て、子供　関連

・子育てサークル(子育てママの集い)など、作って頂きたい、これを充実させれば若い世帯も入居して下さるのではないでしょうか。
・只今、初めての子育て中ですがハイツ内でのママ友がいません、同じくらいの子供を持つ方や子育て中のママ交流できるようなシステムがないので残念です。集会所などで子育て支援館のような場所や最近のマンションに良くあるキッズルームみたいな場所があればいいのになあ～と思いました。
・子供たちが参加できるツアー　　・子供会

その他

・まだ第 2 いなげハイツに住んで数年ですが、このようなアンケートがあるのがはじめて知りました。とても素晴らしい事だと思いました。
・草野水路の定期的な清掃活動(魚の住む川で有れば良いと思う)
・ラジオ体操をするのは如何でしょうか。
・移動図書館の立ち寄り所となることは無理でしょうか。
・屋上の有効利用(例：太陽光発電、緑化など)についての検討…難しいかもしれませんが。
・自治会活動アンケートと外部委託調査の結果を対応させながら、できるだけ多くの人が話し合う場を作ることが大事かと思い提案します。
・階段委員がその階段の日時を決めて管理事務所を使って階段ごとの話し合い(お茶飲み会)などを行い話し合える機会を作る(或いは棟でも良い)、まずは階段から。
・棟別に集まって、夏祭り、もちつき会などでゲームなどしてみる、出身県別、花見会などはどうか。
・具体的事例など個人情報を守りながら広報してみては如何でしょうか？
・集会所の有効利用：大型 TV の購入(講習ﾋﾞﾃﾞｵ活用)、2F を喫茶室としてサロン化、ﾑﾀﾞをなくしﾘﾆｭｰｱﾙ、1F のｲｽ・机をもっと明るくしたものを購入、照明も、本棚は贈呈してもらい充実させて、本も寄贈してもらう、楽しく入れる集会所を希望。
・月 1 回：日曜日(大型 TV での鑑賞会)2F サロン(映画、講座など 2~3 時間)
・犬の芝生での寄り合い(全部外部から連れて来て、飼い主同士がしゃべりまくり犬は勝手にフンをし、互いにジャレ合うまではいいですが、ｷｬﾝｷｬﾝわめいて朝 6 時など、その声で目が覚めます、フンも一応袋はもってはいるものの野放しの状態、毎日毎日集っています、ハイツの中の人は中庭では散歩させず外に行くと言っています)もしよかったらしばらくの間見まわって禁止して欲しい、その為子供達の遊び場が妨げられています中庭に面する住民は怒っています。
・カラスがうるさいので寄らない方法がないでしょうか。

Social Support for Sustainable Community In Order To Survive an Aging Society

Chizuko Iijima[†]

[†]Graduate School of Education, the University of Tokyo

As birthrates continue to decline, residents of housing complexes also are facing difficult problems with growing numbers of elderly people living alone. In addition, more numbers of elderly people are suffering from dementia, and how they solve situations such as those in which “an elderly person is taking care of another elderly person,” “a dementia patient is taking care of another dementia patient,” or “an elderly person is taking care of a disabled person” is now too much for just one community to handle. We thought we first needed a good assessment of the situation, and based on the theme “social support for sustainable community in order to survive an aging society,” we have been working on solving the problems of the Second Inage Heights as our field work. As a “voluntary action” attempt, we first started attending the neighborhood council meetings and management council meetings, and attempted interviewing the attendees and their friends and neighbors, eventually figuring out the Inage Heights situation. Through strengthening relationships by attending various events, we made it possible to implement a survey.

Keyword: Aged Society, Community, Human Resources Development, Sustainable Society